

政治は国家の政策をめぐる戦いである。この抗争に終わりはない。

現代の世界では、投票で多数派の意見が通るよつに決着をつけるのが望ましいと考えられている。個人や団体がさまざまな見解を持ち、自分たちが支持する政策の長所を主張しあう。それぞれの目的を追求するために、彼らがどれほど堅い決意で挑むか（資金や威信や権益をどこまで賭けるか）によって結果が大きく変わる。このことは誰もが認めるだろう。

こうした協議や論争が剥き出しの暴力に訴えることなく行なわれるとき、その国は安定していると認められ、民主国家とも呼ばれる。政策をめぐる論争は過熱することが多い。当然のことだ。政治というゲームの基本ルールが争点となるからだろう。政策を決める過程に誰が参加するのか。政策の対象とする範囲はどこまでか。ある地域の土地と財産を所有し、相続するのは誰か。

このような戦いを「体制をめぐる抗争」と呼ぶことにしよう。抗争をまねく状況はさまざまで、異なる性質が異なる。植民地が支配勢力からの独立を目指す。国内で政治的（さらには経済的・社会的）な権利を奪われている「少数派」がいる。（人口の上では多数派かもしれない）彼らが体制を変えようと戦う。土地や国境をめぐる永年にわたって抗争することもある。

対話の前提、力と抗争 そして平和への道

過去一〇年間に世界の注目を集めた抗争をいくつかリストにあげてみよう。

インドとパキスタンのカシミール抗争

南アフリカの人種差別抗争

北アイルランドの抗争

チエチエンの抗争

イスラエルとパレスチナの抗争

チアパスとメキシコの抗争

南スーダンの抗争^{〔1〕}

クルド民族とトルコの抗争

バスク民族とスペインの抗争^{〔2〕}

東チモールとインドネシアの抗争

コソボとセルビアの抗争

〔1〕一九五六年、英国からの独立後、アラブ系のスーダン政府は独裁色を強め、北側が南を弾圧する構造となった。これに対し、南側はスーダン人民解放軍（SPLA）を結成して抵抗した。その後、旧ソ連が南を援助し、北側政府は崩壊。八九年のクーデターで再びアラブ系の独裁政権が誕生し、今度は米中央情報局（CIA）が南を支援した。その後も混乱が続き、一〇〇万人が餓死したと伝えられる。

〔2〕スペインとフランスの国境であるビルネー山脈の周辺はバスク地方と呼ばれ、そこに住むバスク人たちは一貫して独立を要求してきた。フランス独裁下のスペイン政府が弾圧したため、バスク祖国と自由（ETA）が組織された。八〇年に自治州が成立したが、ETAは完全独立を求めて活動を続けている。

た時期があること。対立する勢力の一方が現状の体制を守ろうとして、他方はそれを大きく変えようとしていること。

言うまでもなく、抗争の状況はまったく違うが、あえてこのリストを作ったのには理由がある。それぞれの抗争には「弱者」と「強者」がある。しかし世界の世論が結束して、どちらか一方を支持することはない。イデオロギー

が必ず弱者に味方するわけではなく、他国からの支援が強者ばかりへ送られるとは限らない。私はこの事情を明らかにしたかった。

コソボを支持した人びとがいる。彼らはバスク人を支持しないかもしれない。南スーダン人を支援しても、パレスチナ人へは理解を示さない。

もちろん、人びとは自分たちが矛盾しているとは思わない。抗争にはそれぞれ固有の背景があり、「弱者が守られるべきだ」という倫理観を一樣に当てはめることはできないと主張するだろう。

抗争は、対立する勢力が互いに投げかけ合ってきた言葉の歴史でもある。それを振り返りながら、さらなる共通点を探してみたい。

抗争の背後にある怨恨は、遠い

昔の出来事を起源としていることが多い。ある集団が征服された。追放されたこともあった。彼らの土地が略奪された。悲劇はなぜ起きたか。彼らの集団が征服者の集団よりも弱かったからだ。

征服し、追放し、略奪した過去の行為が政治構造を形づくった。これが弱い集団の権利を奪い（征服者の宗教や言語を強制して）文化の崩壊を促した^{〔3〕}。こうした政治構造が怨恨を生むことも多い。

〔3〕一九一〇年～四五年、朝鮮を占領した日本は暴力と強権によって朝鮮文化の根絶を進めた。朝鮮の人民に日本名を強制し、学校や職場で母国語の使用を禁じた。また人民をすべて神道に改宗させている。一九一九年三月一日の独立運動を日本は徹底的に弾圧し、多くの学校や教会、寺院を破壊した。死者は数千人、傷害と逮捕拘禁は数万件を数えた。

抗争を彩る言葉の歴史はおおよそ次のように進んできた。

〈第一段階〉強い集団はあらゆる面で優れ、弱い集団の文化は劣っていると主張して、強い集団が政治構造を正当化する。

〈第二段階〉弱い集団が団結して、強い集団の偏狭な言葉に対抗し、より「平等な」政治構造の実現を求め。

〈第三段階〉強い集団が弱い集団の要求を無視するために、制度上

イマニュエル・ウォーラーステイン 1930年生まれ。社会学者。ニューヨーク州立大学ビンガムトン校付属フエルナン・ブローデル・センターの所長を務めている。「近代世界システム論」提唱者。

翻訳・注 / 安濃一樹・別処珠樹。本文中（ ）は著者注、[]は訳者注。

Immanuel Wallerstein, Commentary No. 91 (June 15, 2002) "Prerequisites, Power, and Peace." Fernand Braudel Center, Binghamton University
図 : <http://fbc.binghamton.edu/commentr.htm>
著作権 / 原文に関するすべての権利はイマニュエル・ウォーラーステイン本人が留保する。
翻訳および記事掲載に際しては本人の許可をえた。



イラストレーション / 吉間ユカリ

の改革を目指す政治交渉が開ざされる。

〈第四段階〉弱い集団から暴力行為をはじめた分子が現れて、世界が抗争に気づく。

第四段階まで進むとき、強力な外部勢力の支持をえて、それをつなぎ止めることが政治活動の一部となる。

そのため、強い集団は弱い集団の暴力がいかに不正なものであるかを訴え、その暴力に譲歩するという前例など作るわけにはいかならないと切々。強い集団は「平和」を導く対話の「前提条件」として暴力行為を止めるよう要求する。弱い集団は、暴力行為がなければ自分たちは無視されることをえ、政治的な「解決策を探る対話だけが暴力に終止符を打つ」と彼らは主張する。

「Indasse」行き止まりだ。第四段階に入った抗争は誰の目にも明らかだ。

インド政府は要求する。パキスタンがインド領に潜入する者たちを取り締められ。

南アフリカの人種差別政権は拒否する。アフリカ民族会議が暴力行為を自発的にやめるまで、ネルソン・マンデラを釈放しない。

北アイルランドのプロテスタントは訴える。交渉を進める前にIRA（アイルランド共和軍）が武装を解除しなければならぬ。

ロシア政府は断言する。チェンエンの反乱軍兵士はみな犯罪者である。

シャロン首相は言い切る。一切のテロ行為がなくなるまでパレスチナ政府との交渉に心しない。メキシコ政府は主張する。治安を回復するためにチアパス州の占領が先で、交渉はその後だ。

スーダンのハルトゥーム政権は説く。南スーダン人は武器を捨てていくべきだ。

トルコ政府は同じことを「国内のクルド人に促し、スペイン政府はETAをテロリストと非難する。

インドネシア政府は東チモール人に残忍な弾圧をくわえ、セルビア人はコソボの反乱を鎮圧するために軍隊を送る。

もう一度言つ。私は、読者が

「弱者」の集団だけを支持するとは思わない。「強者」の側を、ある抗争では支持し、他の抗争では厳しく批判するだろう。私も同じだ。しかし、これらの抗争

が構造的に著しく似ていること、すべての抗争で対立する勢力がまったく同じ論争をしていることに注目しなければならぬ。

対立するどちらの側にも「穏健な人びと」がいて、「妥協」による政治解決を望んでいる。同時に、どちらの側にも「妥協を拒む人びと」がいる。彼らには完全な勝利が破滅しかない。この急進派は、自分と同じ側にいる穏健派との戦いにエネルギーの大半を傾ける。

あるいは、暴力をタイミングよく使つて、「穏健派が進める」交渉を妨害する。「現在も続く」九つの抗争は互いにそれぞれ異なる。もし解決策が見つかるとしたら、それは一つ一つ違つものとなるだろう。しかし、抗争はみな等しく、力と権利をめぐる戦いである。すべての抗争で暴力が使われている。現状の体制を維持しようとする人びとによる暴力があり、現状を改革しようとする人びとの暴力がある。そして政治解決だけがすべての抗争を終わらせる。

「テロリズムとの戦争」が、弱者の集団に暴力の行使をやめさせるための戦争だとしたら、それは風車に槍で戦いを挑むドンキホーテのようなものだ。もちろん、現状の体制を維持しようとする側が十分な力を持っているなら、しばらくは弾圧に成功するかもしれない。しかし、それも束の間である。抵抗する組織が完膚なきまでにつぶ

されることも当然あるだろう。だが、代わりとなる他の組織が出てくる。政治的な歩み寄りが実際になされたときには、より穏健な組織が支持をえるだろう。譲歩がなかったときには、より残酷な組織が台頭する。

こうした抗争の終わりは、いつの時代にも政治がもたらした。武力がそうしたのではない。この事実をわたしたちはぜひとも認めなければならぬ。抗争の最終期つまり第五段階は（たとえれば独仏間のアルザス・ローレーヌ地方をめぐる抗争がそうだったように）今では歴史の逸話として伝えられている。これが、対立する双方が学ばべき政治の教訓である。

それでも、政治解決には必ず暴力が伴つ。抗争のどちら側も暴力を行使する。あらゆる重要な問題をめぐり暴力が生まれる。これは避けられない。

政治を云々するときには道徳を脇において、ずばりと言つ

ほうが役に立つかもしれない。

譲歩や妥協はかならず痛みをともなつ。その痛みは今の世代が分かち合い、自分たちの代だけに留める。やがて痛みは癒されて、まだ生まれていない次の世代は過去の痛みを思い浮かべることさえない。譲歩とはそつあるべきものだ。こうした政治解決こそが永年の平和をもたす唯一の道である。

（時事評論九二〇〇二年六月一五日）